



一隅を照らす運動総本部だより
No. 71



一隅を照らす運動ホームページアドレス
<https://ichigu.net>



令和七年度タイ・スタディー ツアーを実施

一隅を照らす運動スタディーツアーが令和七年十一月十四日から十七日の日程で開催された。本年は比叻山高等学校および駒込高等学校から各四名の計八名の生徒がタイのドウアン・プラティープ財団本部およびその関連施設を訪問した。

高校生を対象とする本ツアーは、平成二



「生き直しの学校」 チュンポーン校での集合写真

十八年度より開催されており、本年で六回目を迎える。高校生がアジアの貧困地域の現状に触れ、机上での学習だけでは得ることのできない経験を積むことで、「一隅を照らす」人材を育成することを目的に実施している。コロナ禍は開催中止を余儀なくされたが、令和六年度より再開された。一行は十一月十四日深夜に日本を出発し、同日早朝、タイに到着した。その後、バンコクにあるドウアン・プラティープ財団を訪問した。

財団本部で高校生らは、教育里親事業にて総本部が支援を行っている奨学生八名およびプラティープ・ウンソクタム・秦女史と面会した。奨学生の最年少は中学一年生、最年長は高等専門学校一年生。自己紹介の後、勉強・趣味・将来の夢について意見交換を行った。プラティープ氏からは財団の諸活動の説明を受け、その後の質疑応答では、財団の諸活動に対する高校生の疑問に回答いただいた。

正午前には財団が運営を行う幼稚園を訪問。高校生は各部屋に分かれ、園児と交流した。園児らは知育玩具を用いたモンテッソーリ教育を受けており、時折、高校生に助力を求める様子が見られた。昼食時は高校生が配膳を手伝った。

正午からは、財団職員の引率で、バンコ

クで最大級のスラム街であるクロントイ・スラムを視察。事前説明を受けていたが、様々な問題を抱えるスラムの現状を目の当たりにした。衛生環境は悪く、所々電線が頭の高さまで垂れ下がり、有毒生物も闊歩、危険な場所が数多く存在した。しかし、そのような中で当たり前のように生活する住民の姿、駄菓子屋や食事処、コインランドリー、憩いの場（カメ池）が見られ、人が確かにそこで生活しているという現実を強く突きつけられた。

財団を後にした一行は、「生き直しの学校」チュンポーン校へ移動。到着は日没後であったにも関わらず、多くの子どもたちから熱烈な出迎えを受けた。

翌十五日より本格的に交流を開始。二日間という短い時間ではあったが、高校生は「生き直しの学校」の子どもたち約三十名と生活を共にした。その中で子どもたちが日々行っている掃除や作物収穫、家畜飼育等を体験し、共同生活の中で協調性を育み、日常生活能力を培っていることを学んだ。緊張からか、互いにぎこちなさが目立ったが、ソングラーン（水かけ祭り）やロイクラトン（灯籠流し）といったタイ文化を体験する中で徐々に打ち解けていった。また、高校生はイス取りゲームやたこ焼き作り、童謡「もみじ」合唱を通し、子どもたちに



財団創設者のプラティープ氏と面会（プラティープ財団本部）

十一月十四日

日本文化を学んでもらった。言語の壁がありながらも、互いに歩み寄り、関わり合おうとする姿が頻繁に見られた。

十六日の送別会では、別れに涙する姿が互いに見られた。

一隅を照らす運動総本部では、より多くの「一隅を照らす」人材を育成するため、宗内のみならず日本の青少年を対象に、今後もスタディーツアーを続けていく。



クロントイ・スラム現地視察



プラティープ幼稚園の園児と交流



ソンクラーン（水かけ祭り）を体験



イス取りゲームで日本文化交流

十一月十五日



童謡「もみじ」の合唱披露

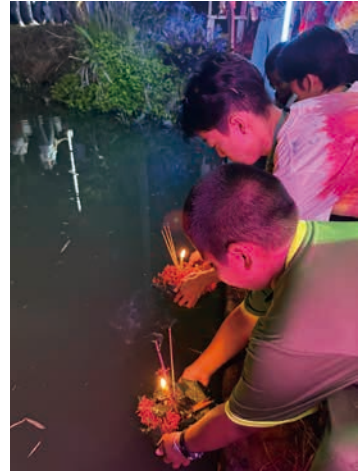


たこ焼き作りを伝授

鶏卵採集と餌やり
(朝課体験)



十一月十六日



ロイクラトン (灯籠流し) の様子



キノコの収穫
(朝課体験)



皆で手を繋ぎ、別れを惜しむ



ドリアンの植樹

スタディーツアー参加感想文

タイ・スタディーツアー感想文

比叻山高校 二年 西村 ひなた

タイ・スタディーツアーに参加しようと思っただけは国際問題に興味があり、このような体験は今後経験できないと思っただけからだ。また、直接現地の人々と触れ合うことで自分に協力できることを考えたいと思っただけで、多くの期待を胸に私はタイへ旅立った。

一日目

まずバンコクへ着き、そこからプラティーン財団バンコク本部へ向かった。空港から出た時に感じた外の空気は暑くて重苦しく、日本とは違う匂いがした。始まったばかりだがこんな環境で自分は生活できるのかという不安を抱えてしまった。専用車で移動する際に気づいたことは、道路がとても混雑していて日本メーカーの自動車がたくさん走行していたことだ。また、バイクの利用者も多く、その中にはヘルメットをしていない人も多くいた。中には小さな子どもとバイクで二人乗りをしている親子や軽トラの後ろの荷台に乗っている人も見かけた。移動中に初めてスラムを見た時は衝撃を受けた。写真などでは何度か見たこと

があっただが、今にも崩れそうな家や、すでに崩れている家もあった。しかも家の中には丸見えで、家の下はゴミで埋め尽くされていた。その初めての光景に驚いていたら、あつという間に財団に到着した。そこでプラティーンさんやスラム出身の中学生、高校生との交流を行った。プラティーンさんは子どもの時から苦労してきたにもかかわらず、子どもたちのために学校を開き、賞で受賞したお金でさらに数多くの施設を開いてきたそうだ。私はその広い心と行動力に感心した。プラティーンさんの話を聞き、改めて教育は大事であることを心から確信した。後に訪れる予定のチュンポーン校を含め、生き直しの学校では不幸な過去を捨て去るためにコミュニティの発達が必要であると言っていた。そこでの私たちとの交流は彼らにとっても大変貴重なものであるということがよく分かった。その後、幼稚園へ行き、子どもたちとおもちゃで遊んだ。幼稚園にいる子どもたちは先生に頼らないで自分で使い終わったおもちゃを片付けていた。新しいおもちゃを出す時も同様にしていた。自分たちで考え行動することを重視した教育をしているとよく分かった。その後スラム街を歩いた。スラム街に入った途端、吐き気がするような匂いを感じた。今にも崩れてきそうな建物、山のようなゴ

ミを間近で見た。また、頭上には数十本の電線が絡まって垂れ下がっていたので日傘をさすこともできず、暑い日差しに照らされ続けながら見学した。犬には警戒するようには言われていたが、目の焦点が合っていない犬を見た時はとても怖かった。犬以外にも毒を持つオオトカゲのような爬虫類も見かけた。あとから聞いた話によるとスラム街の地面には大麻が落ちていた可能性もあったようだ。実際、夜になると薬物の売買などが行われたりするそうだ。昼間は売人たちが働きに行っているため老人や子どもたち、犬しかいないので夜よりは安全であるらしい。私たちが危険なスラムの中に入る事ができたのは貴重な経験だったと思う。実際にそこに入らないと感じられないこともたくさんあったと思う。その後チュンポーン校へ向かった。たくさんの子どもたちが出迎えてくれてとても暖かい雰囲気でも対面した。

二日目

初めはお互い緊張していたが、二日目のチュンポーン校散策では小さい子たちが手を繋いでくれたり、タイ語で何かを必死に伝えようとしてくれて嬉しかった。そこから少しずつ仲が深まった。その日の昼食は子どもたちと一緒に食べた。話したいこと

があつて英語で話しかけてみたが上手く伝わらず、伝わつたとしてもその後の話が續かなかつた。話したいという気持ちはあるけれどジェスチャーや自分の知っている英語だけでコミュニケーションをとるのは想像していたよりも難しいと分かつた。そしてソングラインという水掛祭りを体験した。この体験がさらに子どもたちと打ち解けあえる機会になつたと思う。私にとつても今年で一番はしゃぐことができた時間だつた。その後チウンポーンの地域の人たちと交流してみんなで無茶ぶりダンスを踊つて楽しんで。ミスチウンポーンにも会えた。とても可愛かつた。最後は地域の人たちがクラトン（灯籠）を流す場所まで音楽で盛り上げながら誘導してくれた。日本とは違つたノリがあつてとても幸せな空間だつた。

三日目

この頃にはみんなほとんど打ち解けてとても仲が深まつていた。バレーやバスケット、サッカーなどのスポーツもした。その後はアブラヤシ農園に行く際に車の荷台部分に乗せてもらつて風を感じながら移動した。ジュラシックパークの世界にいるような気持ちになつた。チウンポーン校に戻つてから日本のお菓子を子どもたちに食べてもらった。日本ならではの煎餅などはあまり

人気がなく、グミやチョコレートが人気だつた。その後の交流では爆弾ゲーム式で大量のペビーパウダーを顔につけあつて遊んだ。真つ白にされた。そして本当に最後の交流会。私にとつても懐いてくれた子がお別れの際に泣いてくれた。泣いてくれるとは思つていなかったからびつくりしたし、余計寂しくなつた。自分がその子やその他の子どもたちに少しでも何かいい影響を与えられたのならここに来て本当によかつたと思えた。また会えるかどうかは分からないけど、心の優しい子どもたちには幸せになつてほしいと思つた。

感想

今回の研修に参加したことで私の視野は大きく広がつたように感じている。多くの初対面の人たちとコミュニケーションをとることで国際問題に対して共感や新しい発見がたくさんあつた。私は以前から乱れた世界を平和な世界にするためには、教育は大事であつて優先すべきものだと考えている。教育は国際問題を解決するためにも必要不可欠であると改めて感じた。生き直しの学校では教育を通しコミュニケーションの大切さを学ぶことで、子どもたちは主体的に発言、行動し自立していくのだとよく分かつた。現代でも教育が発達していない国は世

界中に多く存在すると思う。私はこの体験を通して学んだ教育の大切さを身近な人にはもちろん、多くの人に伝えていきたいと思う。今回は通訳の方がいてくれたため不便なことは少なかつたが、自分の力で会話ができればもっとコミュニケーションがとれ楽しくなると思つた。だから私はこれからも英語の勉強を続けて将来に繋げていきたい。また子どもたちの笑顔を増やすきっかけに繋がるこのような交流を今後も続けて欲しいと願う。今回貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

タイ・スタディーツアー感想文

比叻山高校 二年 佐々木 ゆり

十一月十四日の未明、私たちはこれから始まる旅と新たな出会いに期待と緊張感をもつてタイへと出発した。

一日目はバンコク市内でのプラティープ財団本部視察、スラム街の見学だつた。本部へ向かう車内で、早速タイの深刻な経済格差を目の当たりにした。川をはさんで向こう側には今にも崩れ落ちそうな家がずらりと並んでいる。空港近くの高速度道路から見えた都会とはまるで別世界のようにだつた。そこがスラム街であると教わつたとき、これからこの場所を見学するのだという実感

と緊張を覚えた。

プラティープ財団本部ではまず、現地の子どもたちとお互いの生活や文化について対話を通して交流した。緊張のあまり整理しきれない私の発言も、真剣な眼差しで聞いてくれた。一人一人が様々な趣味や打ち込んでいることについて話してくれて、彼らの生活にとっても興味を抱いた。その後、プラティープさんから生き直しの学校やスラム地域が抱える問題、これからの課題などについての説明があった。事業について何うほど、タイが抱える経済格差は私の想像をはるかに超えるものと知った。これからの課題は、古い電線からの漏電による火災を防ぐなどのスラム地域の環境改善だそう。実際にスラム街を見学してみると、大量の電線が絡まり合っている。建物同士の間隔はとても狭く、不衛生な状態だった。とてもここで人が生活しているとは思えなかった。だが実際には多くの人々の暮らしがそこにはあるのだ。そのリアルさを肌で感じ、大きな衝撃を受けた。

二日目と三日目は生き直しの学校チュンポーン校の子どもたちとの交流だった。チュンポーン校の子どもたちはとても明るくフレンドリーで親切だった。一日目の夜、施設に到着した私たちを満面の笑顔で迎えてくれた。荷物まで運んでくれて中には手

かばんまで代わりに持とうかとジェスチャーで示してくれる子どももいた。誰に言われるまでもない自発的なその親切心は、私たちを心から歓迎してくれている気持ちの表れだったのだろう。そんな子どもたちと過ごすことができる時間は最高なものになるに違いないと私は確信した。そして実際に、この二日間は学びの多いかけがえのない思い出となる。

生き直しの学校での一日目、朝市から帰ってきた後に施設内を案内してもらった。とても広く自然が豊かな場所で子どもたちはそれぞれの役割をもって生活しているようだった。その後は石鹸作りと灯籠作りをした。子どもたちはとても親切で、丁寧に作り方を教えて手伝ってくれる。灯籠作りの途中、私の班に用意されていた飾りのお花が足りないのを見て、紫のお花を摘んできてくれた子がいた。なんて親切なんだろうと驚いた。そのおかげで、私の班の灯籠は色鮮やかに仕上がった。言葉が通じなくても、ジェスチャーや簡単な英語を使って私たちは楽しい時間を共有した。昼食後は、ソングクランと呼ばれる水かけ祭りを体験。想像を上回る子どもたちのパワフルな攻撃に、私たちも小さい頃に戻ったような気持ちで夢中になった。お互いに遠慮なく水を掛け合えたことで、より深く打ち解け合え

た気がして嬉しくなる。夜になると灯籠流しのために町の人々が集まって、ダンスや生演奏を披露してくれた。みんなで円になって踊った時間は、この旅の中で最も印象に残った思い出の一つだ。出会ったばかりとは思えないほど明るく気さくに接してくださり、灯籠流しが終わるまで盛り上がりは続いた。夕食は子どもたちと一緒に食べた。話したいことがたくさんあるのに言語の壁が立ちだかってもどかしい。それでも身振り手振りを交えて言葉が伝わったときには、えも言われぬ喜びを感じた。私たちの仲は確実に深まっていった。二日目は子どもたちが毎朝しているという、きのこの収穫と外掃除から始まった。初めての体験はとても楽しかったが、これを朝早い時間から毎日していると思うとその大変さを身にしみて感じた。私たちの普段の生活からは考えられないことだ。朝食の後はドリアンの植樹へ向かう。力が必要な作業だったが、子どもたちに何度も助けられた。その後向かった天台宗が支援するアブラヤシ農園では、一隅を照らす運動との関わりを直接目にした。説明を聞くなかで、この農園が長い年月の間生き直しの学校を支えてきたのだと知った。その後、レクリエーションを通して絆が深まってきた頃に私たちがバンコクへ戻る時間になった。もつと一

緒にいたい、もつとたくさんのお話を話したいと心から思った。こんなにも別れを惜しむことになるのは正直思ってもみなかった。子どもたちも同じ気持ちのようで、中には涙を流してくれる子もいる。別れが寂しくて悲しいのは、きつとこの二日間心が通じ合った証だろう。最後に、一人の男の子が代表して日本語で手紙を書いて読んでくれた。手紙の最後に「また来てください。僕たちはここで待っています。」といった内容のことを伝えてくれた。この言葉は深く印象に残っている。必ずまた会いたい、本当に出会えてよかったですと恋しさを感じながら、チュンポーンでの活動は終了した。

私はタイで過ごした四日間で、人と人との繋がりやの尊厳と大切さを学んだ。人は一人では生きられないし、それぞれが自分の住む場所で、困難や苦勞と向き合いながら協力して生活している。当たり前のようにだが、スラム地域に住む人々にも、生き直しの学校で生活する子どもたちにも彼らの生活があつて、その中にやりがいや、さまざまな形の幸せが存在する。幸せや困難も私たちとはまったく異なる経験から得ているのだと改めて感じた。チュンポーン校の子どもたちは本当に親切で思いやりがあり、周りをを見て行動に移すという一連の動作を

身につけている。私たちが迷っていたり、困っていたりしたらすぐに察して教えてくれた。そんな姿を私も見習いたい。また、タイの人々が挨拶をするときに、必ず手を合わせてくれる姿が印象的だった。これは「ワイ」といって相手への敬意や感謝を伝える意味があるそう。最終日に観光バスの運転手さんにお礼を伝えに行った際には、私たちのキャリーケースを降ろしてくださっていた手を止めてまで手を合わせてくれた。小さなことかもしれないが、このような心温まる経験がこの四日間にはあふれていた。こういったものを宗教的なものとして片づけずに、その心がけを私も大切にしたいと強く感じた。

旅が始まる前は、タイへ行くことで日本で過ごしていることがどれだけ恵まれたものであるのかを痛感するのだろうと、どことなく考えていた。もちろん普段の生活に改めて感謝する大きなきっかけになったが、得たものはそれだけではない。環境の裕福さと幸福は必ずしも同じではないのかもしれないと感じた。生き直しの学校の子どもたちは前を向いて、希望をもつてたくましく前進している。今回の旅で出会った子どもたち、また駒込高校の4人とのまさに一期一会な出会いを忘れずに、将来の目標の一つである留学を通して多様な立場の人々

と向き合える人になれるように。私も目の前のことに一歩ずつ取り組みたい。置かれた環境で自分ができる精一杯を考えること、またその状況に身をおけることへの感謝を改めて肝に命じたい。

タイ・スタディーツアーを終えて 『出会いと学びに満ちた四日間の記録』

比叻山高校 二年 保井 若菜

十一月十四日深夜一時頃、私たちは夜の大阪の街を背に、バンコクへと飛び立った。初めての海外に胸を弾ませる気持ちと、少しの不安を抱えて。

早朝、目を覚ますとちようど朝食の機内食が配られる頃だった。シーフードと野菜がピリ辛に味付けされたサラダを食べ、タイに上陸する実感が湧いてきた。スワンナプーム国際空港にて駒込高校のメンバーと合流し、いよいよタイでの四日間の活動が幕を開けた。まずはバンコク市内にあるドゥアン・プラティープ財団を訪問し、プラティープ先生から財団についての説明を受けた後、財団から奨学金を受けて学んでいる子どもたちと意見交換を行った。子どもたちに将来の夢を尋ねてみると、「タイ語の先生になりたい」「ビジネスを学んで商売で儲けたい」「絵が得意なので画家にな

りたい」などと、一人一人が目を輝かせて話してくれた。貧しい状況にあっても一生懸命に学んでいる子どもたちを前にし、ぜひ夢を叶えられるよう頑張ってほしいと強く願った。タイのおやつを振る舞っていただき一服した後、道路を挟んで向かいにある幼稚園にて、園児たちの活動を見学した。そこで行われている教育は、私たちが幼稚園で受けたものとは一味も二味も異なるものだった。その名も「モンテッソーリ教育」——大人は決して教え込むのではなく、子どもたちの発達段階に合わせた環境を用意する。そして子どもたちは教具を自ら選び、試行錯誤しながら取り組むというものだ。園児たちは皆、自分のところでパズルや絵合わせなどに集中していた。幼稚園児だった頃の私たちは果たしてこんなことができただろうか。きつと友達のところに行っておしゃべりをし、気づけば一緒に遊んでいただろ。その点、ここの幼稚園の子たちはとても賢いと思った。お昼になり、園児たちの給食の準備を手伝った。私たちが一人一人に視線を合わせ、おかずの入った器を渡していく。子どもたちは皆、手を合わせて「ありがとう」の気持ちを伝えてくれた。幼い頃から純粹に感謝の気持ちをもっている園児らに、またまた感心させられた。給食の様子を最後まで見届け、次に歩いて

向かったのはスラム街。すぐ頭上には電線が垂れ下がり、地面には動物のフンがあちこちに見られる。途中、巨大な爬虫類に出くわすハプニングにも見舞われたが、頭上と足元に気を付けて進み、無事にプラティープ財団の建物に戻って行くことができた。空港付近の高層ビル群を思い出し、格差があまりにも大きすぎると感じた。都市の開発も大事だが、まずはこのスラム街の住民が安心安全に暮らしていける環境を整えていただきたいと思った。夕方、私たちは飛行機でバンコクからスラタニへ移動し、そこからバスで「生き直しの学校」チュンポーン校へと向かった。到着すると、施設の子どもたちがお花で作った飾り物を手渡して歓迎してくれた。タイ色満点の夕食をご馳走していただき、メンバー同士の仲を深めたところでこの日の活動は終了した。

翌日、チュンポーン校の子どもたちとの交流が始まった。ここの施設の子どもたちは皆、タイ語を話している。初めは戸惑った。でも、施設で皆に可愛がられている犬について気になったので、近くにいた子に犬の名前を聞いてみた。すると、「ダン」という名前だと教えてくれた。そこで、私が英語で「ダン はめちやくちゃ大きい犬やね」と言うと、その場にいた子どもたちが皆、爆笑した。どういう状況か分からずに

いると、一際大きくていかにも愛されキャラな子が、自分の名前も「ダン」だと名乗り出た。私はとても申し訳なく思つて謝つたが、笑顔で「大丈夫だよ」と伝えてくれた。皆の笑いとれたこともあり、一気にチュンポーン校の子どもたちとの距離が縮まった。その後は、子どもたちに教えてもらいながら石鹸や灯籠を作つてタイの文化を体験し、私たちの企画で椅子取りゲームやたこ焼き作り、合唱の披露を行った。たこ焼き作りの際には、たこ焼きの形が悪い部分に追加で生地を注入する職人や、出まがり寸前のたこ焼きに追い油でカリッとジューシーなたこ焼きに仕上げる天才が現れた。チュンポーン校の子どもたちの豊かな発想に驚きの連続だった。自由時間には、子どもたちとバレーボールをして楽しんだ。仲を深めるうちに、子どもたちが私を「わかめ」と呼び始め、それを面白がって「わさび」と呼んでくる子も連続した。小さい頃に「わかめ」とからかわれたことはあるが、「わさび」はさすがに初めてだったのが、驚きつつも、日本料理に欠かせない食材である「わかめ」や「わさび」を知ってくれていたことが嬉しくてたまらなかつた。その後、タイの伝統行事であるソンクラーン（水かけ祭り）やロイクラトン（灯籠流し）祭りを夜まで楽しみ、この日の活動を

終えた。

次の日は、私たちがチュンポーン校を出発する日ということで、昼頃にお別れ会が開かれた。チュンポーン校の子どもたちと質問をし合ったり、一緒に過ごした感想を伝え合ったりした。一人の子が「二週間後にまた来てほしい」と言ってくれたときは、二週間後という絶妙な設定に微笑ましく思うと同時に、「本当に来たい」と本気で思った。別れ際には、子どもたちがバスの中の私たちに最後まで手を振り続けてくれた。私たちも、子どもたちの姿が見えなくなるまで全力で手を振って別れを惜しんだ。

最終日はバンコク市内の寺院を巡り、ショッピングモールで両手いっぱいのお土産を購入した。タイでの最後の夕食は、空港近くのホテルにて。タイで過ごす内に考えさせられた「本当の幸せとは何なのか」について、皆で語り合った。その後、空港にてガイドさんや駒込高校のメンバーとお別れし、深夜便で帰路についた。

帰国後も、チュンポーン校の子どもたちの笑顔を毎日のように思い出す。そして、「あの子どもたちが頑張っているから私も頑張らなきゃ」と、日々の原動力に変わる。この先もずっと、タイでの四日間の記憶は心の中に生き続ける。

タイで見た景色が私に夢を与えてくれた。

——「日本語教師になりたい」

タイの道路は日本製の車で溢れ、街中には日本食レストランや日本企業の看板がいたるところに見られる。帰国後に調べると、タイ現地の日本企業で働くタイ人スタッフが多くいることや、日本に働きに来るタイ人労働者が増加傾向にあることが分かった。しかし、その前には言葉の壁が存在することを、私はタイに来て痛感した。そして思った。「将来タイで日本語教師になって、日本語習得を望む一人でも多くの人の助けになりたい」と。「言葉のみならず、異文化交流によってもっと多くの人と心を通わせてみたい」と。私は、日本語教授法や日本文化を専門的に学べる学部への進学を考えている。いつの日か、親切にしてください。タイの方々にもう一度お会いしたい。そして、いつかは必ず、タイで生まれたこの夢を叶えたい。

タイでの四日間は、これまでになく出会いと学びに満ち、大変充実したものでした。一隅を照らす運動の皆様、ドゥアン・プラティープ財団並びにチュンポーン校の皆様をはじめ、私たちのタイ・スタディーツアーに関わってください。すべての方々から心より感謝申し上げます。

スタディーツアーで学んだこと

比叻山高校 二年 外村 達哉

今回、私はタイでのスタディーツアーに参加し、六日間にわたってさまざまな活動を行いました。私自身初の海外渡航ということもあり、日本とは異なる文化や生活環境に直接触れることができ、普段感じることができない多くのことを体験できました。

一日目は、バンコクの空港で駒込高校の生徒さんと合流しました。駒込高校の人達とはすぐに打ちとけることができました。少し安心をして旅を始めることができました。その後バスでドゥアン・プラティープ財団の本部と幼稚園訪問とスラム街視察を行いました。本部でのプラティープ先生との対談は印象に残っていることの一つです。先生に対して「様々な課題に対してどのような行動すれば良いか？」という質問をした時に先生は、「ゴールから逆算して行動して一つ一つ問題を解決する」とおっしゃられたことに深く共感をしました。また、スラム街視察では、独特の匂いや感電してしまふような無秩序に張りめぐらされた電線などがありました。引率の方々のおかげで安全に視察することができました。ここでは日本の生活水準の高さを実感しました。しかし、現地の人々は日本よりも幸せそう

に過ごしているように見える時もあり、生活水準が高ければ幸せではないということも同時に強く感じました。二日目は、チュンポーンにある「生き直しの学校」にて交流をしました。早朝には市場に行き、タイ本来の生活雰囲気を感じる事ができました。その後子どもたちとサッカーやバレー、また日本文化紹介としてイス取りゲームを行いました。子どもたちの純粋で楽しそうな表情に元気をもらい、とても楽しい時間でした。午後からは灯籠流しに使う物を自作しました。自分が不器用なこともあり、苦戦しましたが、子どもたちが優しく、そして楽しそうに作り方を教えてくれて、子どもたちの優しさを再実感することができました。その後夕刻まで子どもたちと遊んだ後、チュンポーン校でのロイクラトン(灯籠流し)祭りが始まりました。これが今回一番記憶に残っている行事です。その祭りでは地域の大人から子どもまで参加して、ダンスを一緒におどりました。太陽が落ちたら灯籠流しを始め、打ち上げ花火も同時に行われて、とても華やかでキレイな景色を見ることができました。三日目は交流を終えてバンコクに戻り、四日目は世界遺産を見たり展望台へのぼったりして終日市内観光をしました。

このようにしてスタディーツアーを体験

してみても感じたことは三つありました。一つは「当たり前」だと思っていたことが決して当たり前ではないということ。スラム街視察を通して衣食住の安全が日本より難しい中でも懸命にそして幸せそうに過ごしている人々の姿を見て自分の環境のありがたさを感じ、また小さな事で悩んでいる自分に対して奮起するきっかけになりました。

さらに子どもたちとの交流を通して、幸せとは物の多さだけで決まるものではないということを学びました。タイの子どもたちは日本のように高度なゲーム機を持っていませんでしたが笑顔が多く、友達と遊んでいる時間を心から楽しんでいるように見えました。そんな純粋な姿を見ていくうちに、日本での自分はスマホばかりに気を取られていて人生を楽しみきることができていないのではと反省しました。

一方でタイに行ってみて、言語を正確に話すことよりも、伝えようとする気持ちが大切だと感じる事ができて、怖がることなく相手とコミュニケーションを取ることができました。なので、これから海外へ行く人には言葉を伝えようとすると気持ちもってチャレンジしてみたいです。

今回のスタディーツアーを通して、当たり前だと思っていた生活が当たり前ではな

いことに気づきました。そのため今後はさらに、生活環境、部活動に打ち込める環境、家族、友人に対して感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいと考えています。何気ない毎日にも支えられている人々や環境があることを意識し、小さなことでも感謝できる人間になります。

また、今回の経験から、怖がらずに行動する大切さを学びました。初対面の人や文化の違いに不安を感じながらも、一歩踏み出して行動することで現地の人たちと心を通わすことができました。なのでこれから失敗を恐れることなく、自分からたくさんの方に挑戦し努力を続ける人間になるよう取り組んでいきます。

さらに、大切な人との時間をこれまで以上に大切にしていきたいと強く思いました。人は一人では生きていけず、たくさんの支えの上に成り立っているのだと実感しました。日常の中では当たり前のように接していますが、その「当たり前」は永遠ではありません。だからこそ家族や友人、大切な人たちと過ごす一瞬一瞬を大切に、感謝を忘れないようにします。

今回のスタディーツアーで得た学びは単なる海外経験にとどまることではなく、これからの人生そのものを見つめ直すきっかけとなりました。感謝の気持ちを忘れず、

怖がらず行動し、人とのつながりを大切にしながら、自分自身を成長させていきたいと考えています。そして、この経験を学校生活や将来の選択に生かしていきます。

「名札の意味」

駒込高校 一年 大久保 龍之介
「来年も、再来年も、また一緒に活動しよう。」

チューンポーンでのスタディーツアー最終日、現地の男の子からそう声をかけられたとき、私は初めて、このツアーの意味を身体で理解したように感じました。言葉や国籍、生活環境の違いを越えて、同じ地球に生きる一人の人間として向き合えた。その実感は、出発前に抱いていた問題意識とも深く重なっていました。私がこのツアーにエントリーした原点は、「制度の外にいる人たち」に対する関心です。二〇二一年に入管施設で亡くなられたウイシユマさんの事件を知り、それぞれの立場に正義があることを理解しつつも、司法や福祉へのアクセスが平等でない現実には強い違和感を覚えました。この問題はSDGs 16「平和と公正をすべての人に」に直結し、私の中で「見えない教室」「制度の外で生きる人々」という探究テーマへとつながっていきました。

事前学習では、『タイを知るための72章』を通じ、タイ社会の多層的な構造を学びました。王室財産管理局や政府系企業、外国資本、そして日本企業が存在。三十パーセント医療制度のような社会政策がある一方で、インフォーマルセクターとして制度の外で生きる人々が多く存在する現実。数字や知識として理解していたそれらを、「現場」で確かめたいという思いが、今回のスタディーツアーへの強い動機となりました。

本ツアーは、天台宗が長年にわたり支援してきたドウアン・プラティープ財団との連携により実施されました。一九七八年、スラム出身のプラティープ・ウンソントム・秦さんによって設立されたこの財団は、教育、奨学金、災害支援、戸籍を持たない人々への法的支援など、制度から取り残された人々を包括的に支えてきました。その歩みは、SDGs 4「質の高い教育をみんなに」とSDGs 16を体現するものです。

現地では、幸運にもプラティープさんご本人から直接お話を伺う機会がありました。「支援とは、上から与えるものではない。隣に立ち、共に生きること」。その言葉は、これまで私が本や探究活動で考えてきた理念に、確かな重みを与えてくれました。スラムで生まれ育ったからこそ語れる言葉の一つひとつが、支援を「制度」ではなく、関

係性」として捉える視点を教えてくれたのです。私は駒込高校の代表として参加し、事前準備から現地活動まで、リーダーの一人として意見をまとめながら行動しました。出発前は俳句やカルタなど日本文化の紹介も検討しましたが、現地の子どもたちの年齢を踏まえ、より直感的な交流が必要だと判断しました。そこで活かしたのが、中学生時代に家庭科部長を務めた経験や、地元のことでも食堂でのボランティア経験です。

日本から食材を持参し、現地の子どもたちと一緒にオリジナルのたこ焼きを作りました。食を分かち合うことで、言葉を越えた自然なコミュニケーションが生まれました。イス取りゲーム形式の遊びで、罰ゲームとしてベビーパウダーをかけられた出来事も、大きな笑いを生み、結果的に良いアイスブレイクとなりました。交流が深まるにつれ、握手やじゃれ合い、ボディランゲージが流行しました。万国共通の動作を通じ、前半はグループ単位だった活動が、後半には一人ひとりと向き合う時間へと変化していきました。支援活動では、ドリアンの植林や鶏の卵の収穫など、肉体労働も経験しました。バンコクとは異なり、インフォーマルセクターとして日々の生活を支える人々の姿が強く印象に残りました。事前学習で学んだ「制度の外」という言葉が、具体的

な顔と名前を持った存在として立ち上がった瞬間でした。腕輪型の虫よけを分け合い、子どもたちに贈りました。贈り物が友情や信頼の証となる文化の中で、小さな行為ではありますが、関係を深める大切な一歩になったと感じています。

そしてチウンポーンでのお別れ会。私が共に活動してきた男の子から、名札を手渡されました。その真剣なまなざしから、感謝と再会への願いが伝わり、胸が熱くなりました。名札という特別な所有物を託されたとき、支援とは一方通行ではなく、互いに名前を呼び合える関係を築くことなのだ実感しました。この出来事こそが、本ツアーで最も心に残った瞬間です。

比叡山高校の参加者をはじめ、学校の枠を越えて協働できたことも大きな成果でした。年齢差を感じさせない温かな雰囲気の中で、同じ目的に向かって行動できた経験は、私にとって大きな自信となりました。

今回のスタディーツアーは、支援を点で終わらせず、持続的な仕組みへとつなげる第一歩です。地元で続けていることも食堂の活動や、SafeBridge構想、今後参加予定の上智大学「せかい探究部」での学びと結びつけながら、制度の外にいる人々と社会をつなぐ方法を探究し続けたいと考えています。

本ツアーを支えてくださった天台宗の皆さま、ドウアン・プラティープ財団の皆さまに、心より感謝申し上げます。学校、そして日本を代表して参加した一人として、この経験を胸に刻み、この取り組みが継続できるように発表や探究活動を通じて社会へ還元する決意です。

タイ・スタディーツアー感想文

駒込高校 一年 岡本 有史

私が今回、一隅を照らす運動総本部が主催するタイ海外ボランティア活動に参加させていただいたのは、国際関係学を志す者として、机上の理論を異国の地での実践へと昇華させる重要な一歩だと考えたからです。天台宗宗祖最澄の「一隅を照らす、これすなわち国宝なり」という教えに基づき、タイという発展途上国の一隅で新たな経験を積むことは、今後の人生観に大きな役割を果たすと確信していました。

夜の羽田空港を出発し、タイの首都バンコクに降り立った日、私たちは最初の活動として、親のいない子どもたちの支援を担うプラティープ財団を訪問しました。財団本部での研修に続き、バンコクのスラム地区を見学させていただいたことは、今回の旅で最も衝撃的な経験です。世界が注目す

る観光地としての華やかなタイの印象とは裏腹に、そこには衛生環境の悪さ、生活基盤の脆弱性という厳しい現実が横たわっていました。この現実を肌で感じ、経済的な発展とは別に、教育や生活支援といったさらなる発展と支援の必要性を痛感しました。この衝撃こそが、私自身のボランティア活動への意識を、表面的な交流から、真に現場が求める活動へと引き上げるきっかけとなりました。

私たちはバンコクを離れ、自然豊かなチウンポーン県に移動し、「生き直しの学校」に入りました。この学校に通う子どもたちは、厳しい境遇にありながらも、純粹で健やかな心を持っています。短い期間ではありましたが、彼らとの交流を通じて、深い友情を築くことができました。

特に、言葉の壁を乗り越える上で、バスケットボールやサッカーなどのスポーツは大きな力を発揮しました。ボールを追いかける中で交わされる笑顔やハイタッチは、言語を超えた確かなコミュニケーションであり、互いの心を通わせる唯一の共通言語でした。私たちは日本文化の一端としてたこ焼きを調理し、日本の味に触れてもらい、逆にタイの伝統行事であるロイクラトン（灯籠流し）を地域の方々と共に信じ、信心と美意識に触れることができました。

また水かけ祭り(ソングライン)では、異文化間の交流のあり方について深い気づきを与えてくれました。子どもたちは私たちに對し、全く遠慮することなく全身がびしょびしょになるほど水をぶっかけてきました。このストレートな振る舞いは、日本における「遠慮しあう文化」とは対極であり、心の壁を作らずに接するタイの文化を象徴していました。

三日目の朝は、共同生活に欠かせない朝課から始まりました。日本の準備運動とタイの準備運動を互いに教え合い、その後はグループに分かれて、鶏の卵の回収、キノコの採集、掃除といった、生活に直結した活動を行いました。そして、この日の午後、私たちはチュンポーン校の皆さんとのお別れ会を開き、活動拠点であるチュンポーン県を後にしました。短い交流期間でありながら、別れ際には子どもたちと泣きながらの別れ惜しさを感じ、国境や人種の枠を超えた強い絆が生まれたことを実感しました。

バンコクに戻った四日目は、タイの仏教文化を学ぶ機会に恵まれました。ワット・ポーやワット・アルンといった巨大な寺院を訪問し、その壮大なスケールと緻密な装飾に圧倒されました。これは、タイという国が持つ信仰心の厚さと、その文化の奥深さを知る上で貴重な時間となりました。

今回の活動で最も深く考えさせられたのは、「真の豊かさとは何か、幸せの基準はどこにあるのか」という根源的な問いです。バンコクのスラムの見学で目の当たりにした貧困と、チュンポーン校の子どもたちの屈託のない笑顔は、私の中で大きな驚きを感じました。恵まれた日本での生活が「当たり前」となっていた私にとって、厳しい環境下でも明るく、分け隔てなく接してくれる子どもたちの姿は、大きな驚きでした。彼らの幸せは、モノやお金ではなく、家族や生活社会の温かい繋がりが、そして今生きていることへの感謝に基づいているように見えました。この経験を通じて、私は自身を抱いていた「豊かさや幸せの基準」がいかに恵まれた文明に偏っていたかを意識させ、精神的な満足感こそが人生の本質を作ることを学びました。

水かけ祭りでの経験は、人間関係における私の価値観に大きな影響を与えました。子どもたちが遠慮なく水をぶっかけてきた行為は、言葉が通じなくても、互いを信頼し、心の壁を作らない「ストレートな交流」の重要性を示していました。日本の文化では、相手への配慮のため一歩引いてしまうことが日常的にありますが、タイの子どもたちは全身で感情を表現し、そのことが私たちを早く打ち解けさせる鍵となりました。

この学びは、国際関係学を志す私にとって極めて重要であったと思います。異文化の他者と真に協力し合うためには、形式的な礼儀だけではなく、時に率直に感情を交換し、互いの存在を深く受け入れる姿勢が必要不可欠であると気づかされました。タイ仏教のスケールの大きさに触れた一方で、私が最も心に響いたのは、朝課での卵回収や掃除といった地道な活動です。最澄の「一隅を照らす」という教えは、世界を変えるような壮大な事業だけでなく、「今、自分のできる範囲の、足元の課題に全力で向き合うこと」を意味すると理解しました。貧困や社会問題といった巨大なテーマに対し、まずは自分の周囲の環境を整えることから始める、その小さな積み重ねこそが、最終的に大きな光となるのだと確信しました。

今回のタイでのボランティア活動は、私にとって国際関係学を学ぶ上での貴重な現場経験であると同時に、人間としての成長を促す場でした。この経験を一時的な思い出として終わらせることなく、私は二つの決意を胸に、帰国後の生活を送っています。一つは、タイで再確認した「当たり前への感謝」と、社会生活で学んだ「利他の精神」を、日々の生活の中で実践していくことです。そしてもう一つは、今回の活動で体得した「一隅を照らす」の精神に基づき、自

らのいる一隅を明るく照らしていくという強い決意です。具体的には、大学での学問を深める際も、理論だけでなく、タイで出会った人々の声や現実を常に念頭に置きます。また、身近なところから、地域活動や環境問題に取り組み、自分の周囲を明るく照らす存在となれるよう精進します。

今回の貴重な学びの機会を与えてくださった主催者の皆様、そして温かく迎え入れてくださったタイの皆様は心より感謝します。この経験を人生の礎とし、今後の歩みへと繋げていくことを約束します。

タイ・スタディーツアー感想文

駒込高校 一年 孫 宇

私がタイ・スタディーツアーに参加してまず思ったことは、世界は広いということです。日本とは文化が違うタイに行ってみて、同じアジアであってもこれほど違うのだなと思いました。それと同時に、世界には様々な問題があるということも改めて思いました。日本ではみることのできない劣悪な環境のスラム街を見て貧困という問題がどれだけなものかを実感しました。私は貧困をなくす方法は教育だと思えます。教育によって自分の進む道が広がったり、様々な環境に対応できると思うからです。

プラティーブ財団の幼稚園の子どもたちをみると、日本よりも先進的な教育を受けていて驚きました。小さい子どもたちは、各々のレベルに合った課題を行なっていて、それぞれの自主性に重きを置いた教育を受けていたからです。個人で行動するだけでなく、ご飯を食べるときはみんなを待ってから食べるということもしっかりできていて、とても礼儀正しいと思いました。プラティーブ先生の話を知ると、先生が最初に行なっていた活動も教育の提供でした。財団が創立された当初のタイはドラッグに手を染めた青年たちがたくさんいたと聞きました。人間はしつかりとした知識をつけていれば、ドラッグが危険だということもわかるはずですが、その面で見れば教育は様々な社会問題を解決する上で重要なものだということです。スタディーツアーに行つて改めて深く実感しました。

プラティーブ財団を訪問した後はチュンポーンの「生き直しの学校」へ伺いました。どんな子どもたちがいるのだろうかと思っていました。小学生くらいの子から、高校生くらいの子まで熱烈に歓迎してくれました。「生き直しの学校」で三日間タイの子ども達と触れ合っただけで、タイの子どもたちは毎日が充実しているのだという事です。朝は早く起きて国旗掲揚。

朝課や体操を行った後はみんなでサッカーやバレーなどのスポーツをする。週末スマホをいじってゴロゴロする日本の学生より何十倍も充実していると思いました。スマホを全然使っていないからか一日がとても長く感じられて、夜寝る時もすぐに寝られたと思います。大自然の中で自給自足を行いながら、仲間と生活を送り教育を受けるのはとても素晴らしいです。狭い教室の中だけでなく、もう少し周りの世界の素晴らしさに気づいた方が良いと思いました。タイの子どもたちは毎日のようにサッカーなどで遊んでみんな足も速いし、運動万能でとてもすごかったです。インターネットなどにあまり触れないと言えど、みんな好きなアーティストや好きな曲があつて良いと思いました。アメリカのヒップホップが好きなのもいれば、タイのアーティストが好きな子もいました。私は「生き直しの学校」へ行くにあつて一番心配していたのが言語の面ですが、みんなですポーツなどをした後はそんな心配は消し飛んでいました。スポーツや力比べは万国共通の言語と学んだ。子どもたちの中には日本語を学んでいた子もいてすごいと思いました。言語は教育の中の数ある教科の内が一番子ども達の世界を広げるものだと思います。なので

タイの子どもたちには英語や日本語をぜひ勉強して欲しいと思いました。タイの子ども達とは、灯籠作りを一緒にしたり、石鹸作りやたこ焼きを作ったりしてたくさんさんの思い出をつくりました。日本には体験できないことばかりで、とても楽しかったです。日本の童謡も、「生き直しの学校」の子どもたちだけでなく、地域の方々や村の子ども達にも聞いてもらうことができよかったです。

バンコクの観光では、いろいろなお寺を回ったり、トゥクトゥクに乗ってみても新鮮な体験をしました。一日目はバンコクのスラム街を見て、最終日にバンコクとても発展しているところを見ると、改めて経済格差が激しいということを感じ知らされました。バンコクの街の中にもばらに高層ビルが建っていて日本とはまた違う都市風景でした。東南アジアに行くのは初めてで、とても興味深い経験となりました。

私がこのタイ・スタディーツアーで一番記憶に残ったことはやはりスラム街の視察だったと思います。入った瞬間に漂う変な匂いと痩せ細った犬や猫。そして人が住んでいるかどうかもわからないトタン屋根の家。頭上ストレスの絡みあった電線。日本ではみることのできないレベルの貧困の現

状は今でも深く記憶に残っています。チュンポーンの子どもたちも裕福ではなかったのですが、心は貧しくなかったと思います。たとえ物質的に豊かではなくても、心が豊かであれば良い人生が送れると思いました。私は、このタイ・スタディーツアーに参加する上で書いた作文に教育は重要だということを書きました。前にも述べたように、教育は自分の道を広げたりしてくれます。ですがタイ・スタディーツアーに参加して思ったことは教育は心を豊かにしてくれるということでした。タイ・スタディーツアーで経験したことは一生忘れないと思います。これからもタイ・スタディーツアーで学んだことを活かしていきたいと思っています。

タイ・スタディーツアー感想文

駒込高校 一年 持田 悠花

タイで過ごした四日間は、間違いなく自分の人生のハイライトになるであろう。この期間に、言葉では表し切れない、とてつもなく価値のあることを学ぶことができた。一つ目は、気持ちを強く持つことの大切さだ。幼い頃から、貧困地域の子どもたちの笑顔を見守ることのできる仕事につきたいという夢を描き続けている私にとって、このスタディーツアーの案内は、文字通り胸

をときめかせるものであった。作文は、消し跡で紙が汚れてしまうまで何度も書き直し、面接で自分の思いの丈を伝えられるように何時間もかけて言葉を考え、完璧に伝えられるように練習をした。そして、ありがたいことに一次審査を通過し、迎えた二次審査の面談の日。人前で話すことが苦手な私にとって、部屋の扉を開けた瞬間に待ち構えていた何人もの先生方に私は怖気付いてしまった。スラスラと言えるはずであった志望理由は、一文字も思い浮かばずに、拙い言葉で何度も言い換えながら話したことをよく覚えていた。面談が進むにつれて、夢への道がどんどん長く、向こうの方に行ってしまうような気がして、最後の方は涙目になり、言葉に詰まりながら答えていた。面談後、不合格を確信した私は、息が苦しくなり、呼吸の仕方を忘れるほどに泣き散らかしていた。自分の名前がないことはわかっているものの、ほんの少しの希望を抱いて見た合格者名簿に自分の名前を見つけた時、目を疑い、今度は嬉しさの涙で私の顔はぐちゃぐちゃになっていた。言葉は途切れ途切れになり、伝えたかったことを全て言えたわけではなかったけれど、誰にも負けないスタディーツアーへの気持ちを先生方が感じ取ってくれたことに、どれだけ感謝したことか。あの時の嬉しさは絶対に

忘れない。この時、いかに不安で自分に自信がなくても、夢を大きく描いて、絶対にそれを実現させると信じるこの大切さを学んだ。これは「生き直しの学校」で子どもたちと交流をした時にも感じた。彼らに自分たちの伝えたいことを伝えられず、こちら側も彼らが伝えようとしていることがうまく掴めない時。私にとつての彼らの呪文をくりかえしつつも、身振り手振りで彼らにとつての私たちの呪文を伝えていた時。絶対にこれを伝えたい。彼らのメッセージを受け取りたい。そう強く思いながら必死に会話をしてやっとお互いが気持ちを伝えられた時。そして、彼らとの別れの日。「またいつか会える？」と尋ねてくれた彼に「絶対会えるよ。シーユーアゲイン」と伝えた自分を嘘つきじゃないかと思ってしまう時。そんな自分を否定した時。言語という呪文の壁の分厚さを感じるのとともに、心と体を使えばどんな相手とも交流できること。心に念じて放った言葉、行き渡る美しい景色が脳内にある限りは絶対にそれはいつかの「今」になると確信した。

二つ目は、自分が追い求めてきたことが何なのかだ。それは、初日のドウアン・プラティープ財団の事務所で現地の子どもたちが将来の夢を教えてくださいました。彼らのキラキラとした美しい瞳、そして力強い声を前にして、「やっぱりこれだ」と確信に変わった。自分が求めている景色は、幼い頃からずっと心の奥底にあつて、それは絶対に揺るがないと信じていた。しかし、高校生になってその景色の色彩が徐々に強くなるにつれて、立ち向かう困難とその景色を見るために犠牲にすることの大きさを感じていた。友達が笑いながら放課後や休日の楽しかったひとときを再度味わっているとき。週末の楽しい予定をとっても嬉しそうな顔を見せながら教えてくれる時。彼らの「楽しい」時間にも自分は夢のためにもがきつづけているし、苦しんでいるのだろうなと感じて、我ながら恥ずかしいが、寂しい気持ちを自覚したことは否定できない。そして、自分にとつては「苦しい」が、彼らにとつては「楽しい」ひと時の積み重ねと、遙か彼方で待ち構えているかもしれない、自分にとつての「これ以上なく美しい景色を見た時」。どちらが自分にとつての幸せなのか。その問いの答えはいつも決まらなかつた。後者であったが、前者に惹かれる気持ちも少しある自分が、嫌になり、失望する時もあった。しかし、子どもたちの夢を聞きながら、気づいたら涙目になっていて、とつともなく温かくて嬉しい気持ちを抱いている自分に気づいた時。自分がどんなになつてもいいから、彼らの笑顔を見守り、

彼らの遙か彼方に向かう道が有り続けられるように微力ながらもお手伝いができたなら。直接でなくてもいいから、彼らのたぐさんの笑顔を見ていたい。彼らの溢れる笑顔が、自分が追い求めてきた景色であることが九九%の確信から一〇〇%への確信に変わった。「苦しい」は自分しか味わえない、本当の意味での「楽しい」のはずだ。

三つ目は、行動を起こすことの大切さだ。初日でお話を伺った、生き直しの学校の創設者であり、青少年や保護者、地域社会の教育と開発を目指して様々な事業を展開しているプラティープ先生が、とにかくやるのが大切だと教えてくださった。なかなか一歩踏み出す勇気が出ない私だが、夢を実現するためには躊躇っている暇などないのだと強く感じた。ただ、目の前に聳え立つ山の頂上だけを見て、力強く山を登り続けたい。近道はあるかもしれないが、正しい道などない。遠回りでも、根気強く登り続ければ必ず頂上に辿り着く。美しい景色が見られる。想像を超える、スラム街の現状に呆然とし、日々贅沢なわがままばかりを言っている自分にできることは、誰にも負けない強い気持ちを生かした必死の努力をし続けることだけだ。

友達の前ではほとんど涙を見せたことがない私の涙を幾度となく誘ってくる彼ら。

「自分」を覚えてくれた彼ら。眼前の道をよりくつきりと見せてくれる彼ら。彼らの笑顔をもう一度、いや、あと何十回、何百回と見たい。本場に「幸せになる」姿を見たい。夢だけがでかくて、それに見合う才能も能力もない。今の自分を全て書き表したであろうこの作文を、何百、何千、何万もある峰の途中で足を止めてしまおうであろう自分に向けて。

一隅を照らす運動推進大会

滋賀教区

滋賀教区本部（安藏玄周教区本部長）では、令和七年十月十日に滋賀県近江八幡市



にある文芸セミナーヨにおいて令和七年度第二十四回「一隅を照らす運動」滋賀教区本部推進大会兼滋賀教区檀信徒総会が行われ、二百二十名の参加があった。



はじめに安藏教区本部長を導師に法樂が行われ、続いて荒樋勝善一隅を照らす運動総本部長が祝辞を述べた。その後檀信徒総会が行われた。

次は、北嶺大行満大阿闍梨上原行照師による「行を体験して」と題した記念公演が行われ、「信心のありようで、必ず神仏はお守り下さる」と力説された。

また、天台宗布教師会講師小林恵俊師による「得難くして うつりやすきは 人身なり」と題した記念法話が行われ、伝教大師の聖句をもとに命の大切さを今一度見直し、一隅を照らすとは命を生かすことであると訴えた。

そして、城奈緒美氏による「パイプオルガンリサイタル」と題した記念演奏があり、最後に檀信徒会長の中原博徳氏より荒樋一隅を照らす運動総本部長へ浄財が手渡され閉会となった。

京都教区



京都教区本部（穴穂行仁教区本部長）では、令和七年十月十八日に京都市左京区にある真正極楽寺において、一隅を照らす運動推進大会が宗祖降誕会に併せて開催され、百一名が参加した。

午前中は本堂において、宗祖降誕会慶讃法要並びに写経会が行われ、本堂内に声明や御詠歌が響き渡った。

午後からは一隅大会が開催され、荒樋勝善一隅を照らす運動総本部長より挨拶が述べられた。

続いて、山田松香木店会長山田英夫氏による「香木の魅力」と題した講演が行われた。聴衆は香木にまつわる貴重な内容に傾聴していた。その後、ワークシヨップ「香袋調香体験」が行われ、参加者は香りを楽しみながら香料を調香し、香袋と文香を作



九州西教区本部（嘉瀬慶文教区本部長）では、令和七年十月十九日に長崎県対馬市において、一隅を照らす運動推進大会が開催され、二百十五名が参加した。

九州西教区

重奏が披露された。響き渡る迫力かつ優雅な演奏に参加者一同聴き入っていた。



製していた。絵巻を使った説法では終始ユーモアを交えて語られ、その話しぶりに参加者たちは惹きつけられていた。最後に京都市交響楽団員による弦楽四



はじめに、阿連の伝教大師入唐帰国着船の地に伝教大師像が建立されたことから、嘉瀬教区本部長を導師に伝教大師尊像開眼記念法要が執り行われた。

次に、細野舜海天台宗務総長より感謝状授与と挨拶がなされ、続いて嘉瀬教区本部長より謝辞が述べられた。

その後、講師に大興善寺名誉住職神原玄應師を迎え、「一隅を照らす伝教大師の御心」と題した講演が行われた。伝教大師の教えである「一隅を照らす」について説かれ、聴衆は大いに共感していた。

栃木教区

栃木教区本部（齋藤和道教区本部長）では、令和七年十月二十五日に宇都宮市立南図書館「サザンクロスホール」において、一隅を照らす運動推進大会が開催され、五百名が参加した。本年は初の試みとして、地域活性化イベント「雀宮ムラスズメ」と共



催で行われた。はじめに齋藤教区本部長と村田庸田天台宗参務教学部長により挨拶が述べられた。続いて開演セレモニーとして、元大相撲力士・舞の海秀平氏による「可能性への挑戦」と題した講演が行われた。



講演会後には、ワークショップ「腕輪念珠づくり」と「匂い香づくり」が三部に分けて行われ、大勢の参加者を迎えた。今回、地域イベントと合同で開催し、当日会場周辺で広報をしたことで、より多くの方に「一隅

を照らす精神」を発信することができた。

埼玉教区

埼玉教区本部（杜多堯慶教区本部長）では、令和七年十月二十六日に埼玉教区第五部妙光寺を会場に、第五十六回一隅を照らす運動推進大会が開催され、二百名が参加した。



はじめに第三部福正寺田中亮宏住職を導師に声明公演が執り行われた。次に、

第二部最明寺千田明寛副住職による「共生について」、第六部慶福寺関口亮樹住職による「昔をきっかけに幸せに至る道」と題した法話が行われた。続いて、三遊

亭鬼丸師匠による落語が披露され、最後に写経体験が行われた。その他には念珠作り体験や匂い香作り体験、多数のキッチンカーによる出店があり、多くの人が喜ぶ大会となった。

茨城教区



茨城教区本部（中村純亮教区本部長）

では、令和七年十一月一日に茨城県常総市にある安樂寺において、一隅を照らす運動推進大会が開催され、九十名が参加した。

はじめに中村教区本部長を導師に法楽が行われ、続いて中村教区本部長による挨拶、村田庸田天台宗参務

教学部長と天台宗宗議会議員寺門俊明師による祝辞が述べられた。

次に、千日回峰行者藤波源信師による「どこでも修行道場だ」と題した講演が行われた。千日回峰行についての説明と体験談を話された後、参加者に御加持をして回った。最後に茨城教区安樂寺住職松永博臣師による謝辞が述べられ、閉会となった。

第四十回全国一斉托鉢

令和七年十二月一日、第四十回全国一斉托鉢が開始された。十二月の「地球救援募金強化月間」中は各教区本部を中心に戸別托鉢や街頭托鉢が展開され、師走の恒例行事となっている。本年も多くの方の協力をいただき、令和八年一月三十一日現在で全国各地、合計四十六会場の実施報告があった。

全国での募金総額は八百二十二万八千六百二十二円で、これらの浄財から地域社会福祉向上のために地元の社会福祉協議会やNHK歳末たすけあいなどに届けられたほか、一隅を照らす運動総本部「地球救援事務局」に四百三十五万八千三百九十三円が寄託された。

各地の様相

(令和八年一月三十一日までに各教区より提出された報告書の内容を掲載)

延暦寺一山

十二月一日、比叡山麓の大津市坂本地区一帯で行われ、延暦寺一山住職、延暦寺職員、天台宗務庁役職員、総勢七十九名が参加した。

午前九時より、法螺貝の音を合図に生源寺を出発した一行は、細野舜海天台宗務総長及び獅子王圓明延暦寺執行を先頭にして戸別托鉢を行い、その後、坂本界限にて戸別托鉢を行い、多くの浄財が寄せられた。また、天台宗務庁の役職員と延暦寺



一山寺庭婦人会が、J R比叡山坂本駅と京阪坂本比叡山口駅にて街頭募金を実施した。なお、当日寄せられた浄財はNHK歳末たすけあい及びNHK海外たすけ

あいに寄託された。

滋賀教区本部

十二月十四日、甲南部浄福寺にて総勢四十二名が戸別托鉢を実施。浄福寺信徒先導のもと、八班に分かれて約百二十軒を訪問した。小雨が降る中、寒中にもかかわらず玄関先でお待ちの方や、外灯に灯をつけておられる方など、あたたかく迎えていただいた。寄せられた浄財は、地球救済事務局に十三万円を寄託。

京都教区本部

十二月六日、四条河原町にて総勢十一名が戸別托鉢及び街頭募金を実施。高島屋前及びエディオン前で各四〜五名に分かれて街頭募金を行い、縁故寺院と関係業者には戸別托鉢を行った。老若男女、多くの方に快く募金いただき、小さなお子様の笑顔には一同、心温まった。寄せられた浄財は、京都新聞社に十四万五千二百九十四円、地球救済事務局に十五万五千二百九十四円を寄託。

近畿教区本部

十二月一日、J R和歌山駅前西口広場にて総勢十名が街頭募金を実施。「慈愛の心で助け合い」のスローガンのもと、托鉢を

実施。読経、ティッシュやリーフレット

の配布、宗の活動説明等、駅前広場を歩く人々に全国一斉托鉢の活動を知っていただき、喜捨を頂戴した。寄せられた浄財は、パンニ

ヤ・メッタ子ども家に六万三千八百九十円、地球救済事務局に六万三千八百九十円を寄託。

兵庫教区本部

第一部では十二月二日、J R明石駅前広場にて総勢十八名が二手に分かれ街頭募金を実施。災害支援募金への協力を強く呼びかけたところ関心を寄せ、募金に協力していただけた。寄せられた浄財は、地球救済事務局に四万六千三百七十七円を寄託。

第二部では十二月六日、清水寺、慈門院、眞藏寺の檀中地域にて総勢二十九名が戸別托鉢を実施。数年一度の三つの市に



跨がる地域での托鉢となったが、多くのご協力により今年も多くの浄財をご寄付ただけた。厳しい冷え込みの中で早朝から



らの訪問であったが、外に出て一緒に手を合わせていただける方もおり、大変ありがたく感じた。寄せられた浄財は、丹波篠山市社会福祉協議会に十三万円、加東市社会福祉協議会に二万円、三田市社会福祉協議会に二万円、地球救援事務局に十一万三千四百六円を寄託。

第三部では十二月一日、寶性院檀家地域にて総勢五十五名が戸別托鉢を実施。寶性院役員のご案内により檀家宅の玄関先で読経し、托鉢を行った。協力者の皆さまからは、読経中は合掌し、終わると「ありがとうございます」と「ご苦勞様」といった労いの言葉をかけていただいた。寄せられた浄財は、福岡市社会福祉協議会に十三万四千二百五十円、地球救援事務局に十三万四千二百五十円を寄託。

第四部では十二月一日、姫路駅前から姫路城前までの間にて総勢五名が街頭募金を実施。観光客が多く、海外の方からは托鉢中の写真撮影を求められる場面もあったが、浄財にも協力いただいた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に六万八千五百円を寄託。

第五部では十月四日、法雲寺檀中地域にて総勢十七名が戸別托鉢を実施。毎年秋に部内で実施している天台大師報恩法要に合わせて、



法要担当寺院の各檀徒を対象に、一隅運動への募金を呼びかけた。恒例行事のように受け止めていただき、快くご協力いただけました。寄せられた浄財は、地球救援事務局に三万五千五百円を寄託。

また十二月一日、新温泉町地域にて総勢八名が戸別托鉢を実施。恒例になっている托鉢であるので、皆さまには快く協力していただいております、当日不在の方は

事前に募金してくれた。寄せられた浄財は、新温泉町社会福祉協議会に九万六千五百五十円、地球救援事務局に令和六年能登半島地震災害義援金として九万円を寄託。

第六部では十一月二十九日、照伸寺と正福寺の檀中及び常樂寺の一部檀中地域にて総勢四十七名が戸別托鉢を実施。照伸寺、正福寺の総代、役員のご案内のもと、六班に分かれて檀中の各戸を托鉢して回った。檀信徒の皆さまは積極的に浄財を寄託され、「ご苦勞様です」と声をかけていただいた。寄せられた浄財は、丹波市社会福祉協議会に三万六千円、地球救援事務局に三万六千円を寄託。

岡山教区本部

- ・第一部は地球救援事務局に三万円を寄託。
- ・第二部は第二部災害基金に十万円、地球救援事務局に九万二千二百円を寄託。
- ・第四部は部内各寺院より寄せられた浄財を玉島社会福祉協議会に五万円、地球救援事務局に二十万五千円を寄託。
- ・第五部は山陽新聞社歳末たすけあい運動に三万円を寄託。

山陰教区本部

- ・第一部では十二月一日、觀照院にて総勢



三十六名が戸別托鉢を実施。事前に案内文書と浄財袋を檀信徒に配布。当日は僧侶一名と檀信徒二名程度の班になり戸別托鉢を行い、ポケットティッシュとリフレットをお渡しした。皆さまからは快く募金していただいた。寄せられた浄財は、岩美町社会福祉協議会に五万円、教区仏教青年会に一万円、地球救援事務局に六万三千二百三十一円を寄託。



また十二月十七日、三朝温泉街にて総勢十六名が戸別托鉢を実施。法螺貝を鳴らしながら、三朝温泉街の旅館、ホテル、事業所や周辺の家々を三徳山内寺院住職及び教区仏教青年会、寺庭婦人、檀信徒の皆さまと托鉢を行った。歳末の恒例の行事となり、地域の方々のご協力が快く得られるようになった。また、一隅ののぼりを見た観光客の方のご協力もあった。寄せられた浄財は、三朝町社会福祉協議会に十一万六千九百六円、教区仏教青年会に一万円、地球救援事務局に十二万五千円を寄託。

・第二部では十二月一日、松江市北田町及び米子町にて総勢五名が街頭募金を実施。ハンドスピーカーで主旨を説明しながら巡回した。昨年よりも人通りは少なかったが、皆さまからは好意的に募金いただいた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に四万四千二百二円を寄託。

四国教区本部

・第二部では十二月五日、道後商店街から道後温泉駅周辺にて総勢十四名が街頭募金を実施。常信寺を拠点に道後温泉へ移動。その後、道後温泉から道後商店街を通り、道後温泉駅にて募金活動を行った。外国人観光客は多かったが反応は薄かった。全体



的に興味を示す方が少なめだったが、それでも協力いただける方もいた。当日の寄せられた浄財は、地球救援事務局に三万三千八百十三円を寄託。

九州東教区本部

・第一教部では十二月一日、部内地域にて総勢三名が戸別托鉢及び街頭募金を実施。各町仏教会にて他宗派と合同で実施している。令和七年十一月十八日の大分県佐賀関での大規模火災を受けてか、大変多くのご協力をいただいた。寄せられた浄財は、大分市佐賀関地域大規模火災義援金に三万円を寄託。

・第二教部では部内各寺院にて募金活動を実施。寄せられた浄財は、大分市佐賀関地域大規模火災義援金に五万円を寄託。
・第三教部では部内各寺院にて募金活動を

実施。十一月二十八日から十二月四日までの間、各寺院に募金箱を設置し参拝者に協力いただいた。各地で災害が多発しているもので、皆さまから早く寄付していただいた。寄せられた浄財は、大分市佐賀関地域大規模火災義援金に四万五千円を寄託。

・第四教部では十二月一日、大分市トキワデパート前にて総勢九名が街頭募金を実施。平日の夕方だったため人通りは多かったが、足を止める人が少なかった。しかし親子連れの方はお子さんと一緒に募金をしてくれた。寄せられた浄財は、大分市佐賀関地域大規模火災義援金に二万三千八百八円を寄託。



・第五教部では部内各寺院より寄せられた浄財を大分市佐賀関地域大規模火災義援金に一万五千円寄託。

・第六教部では十二月一日、各寺院周辺地域にて総勢六名が戸別托鉢を実施。寄せられた浄財は、大分市佐賀関地域大規模火災義援金に一万円を寄託。

九州西教区本部

・筑前部では十一月二十六日、普光寺にて総勢十三名が戸別托鉢を実施。普光寺の檀信徒宅、信徒の医院・施設を戸別で伺った。玄関の扉を開けて待っていてくださり、読経が終わるまでの間も玄関先に立って来ていた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に四万五千円を寄託。

・柳川部では十二月十二日、長命寺から柳川商店街までの地域にて総勢七名が戸別托鉢を実施。毎年の恒例行事として理解いただいているようであり、すれ違った方も快く募金に応じてくださった。寄せられた浄財は、地球救援事務局に三万三千三百二十二円を寄託。

・肥前東部及び肥前西部では十一月二十六日、佐賀市中央大通りにて総勢十二名が街頭募金を実施。例年よりも場所を南下し、人通りが多い場所で托鉢を行った。天候には恵まれたが、想定していたより人通りが少なかった。しかし、パンフレットを見せ、托鉢の主旨を説明すると、喜捨していただけた。托鉢行列を見つけ、

来られる方もいた。寄せられた浄財は、NHK歳末たすけあいに五万一千五百九十円、地球救援事務局に八万五千円を寄託。



・久留米部では十二月四日、一番街商店街にて総勢四名が戸別托鉢を実施。部内会にて日程などを決めた上での実施だった。当日協力いただいた方の中には初めて知ったという反応もあり、やりがいを感じることができた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に六万二千八百四円を寄託。

・対馬部では十二月十七日、小茂田地区にて総勢七名が戸別托鉢を実施。出向いた家々で感謝のお言葉をいただけた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に五万五千円を寄託。

三岐教区本部

十月四日、神護寺にて総勢十七名が戸別

托鉢を実施。二班に分かれて神護寺周辺の檀家宅へ出向き、それぞれ十五〜二十軒、玄関先で般若心経と祈願文を読誦した。事前に通知を行っていたので、皆さまから快く募金していただいた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に十一万八千七百二十七円を寄託。

東海教区本部

十二月二十一日、覚王山日泰寺本堂前にて、総勢七名が街頭募金を実施。年末最後の縁日があり、出店が並び多くの参拝者で賑わう中、温かいお声と共に募金に協力いただけました。寄せら



れた浄財は、中日新聞社会事業団に一万円、地球救援事務局に五万九千七百七十三円を寄託。

北陸教区本部

十二月六日、J R金沢駅前広場にて総勢九名が街頭募金を実施。観光客で賑わっていたが、足早に目的地へ向かう人が多く、なかなか立ち寄ってはもらえなかった。しかし、「あ、一隅を照らす」や「天台宗や」と声を出してくださる方もおり、励みになった。寄せられた浄財は、地球救援事務局に十三万二千四百四十八円を寄託。

信越教区本部

十一月三十日、長野部、佐久部、高筑部、教区仏教青年会が合同で善光寺仁王門にて総勢十名の街頭募金を実施。日曜日ということもあり人も多く、「天台宗の一隅を照らす運動」「世界中で発生する災害への救援」という言葉に対し多くの方に賛同いただけた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に令和六年能登半島地震災害義援金として八万五千二百二円を寄託。

神奈川教区本部

十二月一日、J R川崎駅銀柳街及びJ R平塚駅北口にて、総勢四十二名が街頭募金

を実施。のほり旗を掲示し、チラシ・ティッシュを配布しつつ天台宗として全国一斉托鉢を行っている旨を伝え、募金への協力を呼びかけた。また、J R川崎駅ではしょうぐうさん着ぐるみを配置した。通行の方々から好意的にご協力いただき、多くの浄財を頂戴することができた。また教区内各寺院からもそれぞれの寺院で集められた募金を持参いただいた。寄せられた浄財は、神奈川県社会福祉協議会に十万円、教区仏教青年会に五万円、地球救援事務局に二十五万円を寄託。

東京教区本部

十二月十日、浅草寺宝蔵門前にて総勢四十名が街頭募金を実施。参道を挟んで両側から声を出して募金を呼びかけた。のほり旗と横断幕に加え、英語の案内看板も設置。浅草寺の参詣者は外国人の方が多く、英語での案内が功を奏し、特に東南アジア系の方が浄財協力いただけた。また、しょうぐうさんは好評で、一緒に写真を撮る方が多かった。寄せられた浄財は、あしなが育英会に八万円、港区社会福祉協議会に二万四十円、地球救援事務局に十万円を寄託。

北総教区本部

・教区本部は地球救援事務局に二十五万九

千九百二十七円を寄託。

南総教区本部

第一部では十二月一日、J・R茂原駅前にて総勢七名が街頭募金を実施。帰宅者が多い時間帯に、駅前で二、三組に分かれてト鉢をしたが、約三〜四百人が通り過ぎるばかりで、関心を示す方は少なかった。しかし、高齢者や、家族連れの方が協力してくださり、こちらが笑顔で接すると、相手も笑顔になり、ホッとした。寄せられた浄財は、地球救援事務局に三万六千六百六十四円を寄託。



埼玉教区本部

十一月八日、第二部喜多院にて総勢十八名が街頭募金を実施。当日は境内にて「菊まつり」も開催され、参拝者からの協力もある中での実施となった。募金協力者から

は労りの言葉をかけてもらうなど、反応も良かった。寄せられた浄財は、天台仏教青年連盟に七万五千元、地球救援事務局に七万八千一百一十円を寄託。

群馬教区本部

・南前橋部では十二月六日、來迎寺及び泉藏寺周辺にて総勢九十二名が戸別ト鉢を実施。事前に割り振られた担当寺院にそれぞれ集合し、両寺院の役員案内のもと、さらに班ごとに分かれて行った。どの家も事前に連絡が行き届いており、問題なく終わった。寄せられた浄財は、群馬教区本部に二十万円、地球救援事務局に二十万円を寄託。

・北前橋部では十二月三日、龍藏寺周辺にて総勢十五名が戸別ト鉢を実施。部内住職と檀信徒、伝道師が龍藏寺周辺を回り、浄財をいただいた。また、龍藏寺に寄せられていた浄財もお預かりした。寄せられた浄財は、上毛新聞社に七万六千九百五十円、教区本部に十万円、地球救援事務局に九万六千円を寄託。

・西前橋部では十二月一日、観窓寺周辺にて総勢三十名が戸別ト鉢を実施。天台宗全国一斉ト鉢の趣旨をご理解いただき、檀信徒の皆様より浄財を寄せていただいた。寄せられた浄財は、上毛新聞社に二

万円、群馬県仏教保護会に二万円、高崎市社会福祉協議会に一万五千元、教区本部に五万円、地球救援事務局に七万円を寄託。

・高崎部では十二月六日、高崎駅前並びに市街地商店街にて総勢二十二名（内、高崎部僧侶四名）が戸別ト鉢及び街頭募金を実施。毎年、高崎仏教会として他宗派と合同で実施している。土曜日に実施のため駅前は大勢の人が行き交うが、なかなか協力していただくのは難しい状況だった。しかし、商店街で昔から営んでいる商店の方には毎年の恒例行事として認識いただいております、ご協力いただけました。教区本部に三万円、地球救援事務局に三万円を寄託。

・富岡多野部では十一月二十四日、富岡市生涯学習センターにて総勢九十名が募金活動を実施。研修会の参加者へ募金を呼びかけたところ、快く協力していただいた。寄せられた浄財は、富岡市社会福祉協議会に三万六千六百七十四円、甘楽町社会福祉協議会に二万五千元、藤岡市社会福祉協議会に二万五千元、教区本部に一万円、地球救援事務局に一万五千元を寄託した。

・北群馬部では十二月六日、眞光寺周辺及び渋川市市内にて総勢七十名が街頭募金



を実施。今年は昨年以上に檀信徒会、伝道師会の多くの方々が托鉢に参加協力してくださった。今年新たに伝道師になられた方も多く参加された。体調悪化や怪我、事故等のトラブルもなく無事に行うことができた。寄せられた浄財は、洪川市に十万円、上毛新聞社「愛の募金」に十万円、教区本部に八万円、地球救援事務局に八万円を寄託。

沼田部では部内寺院より寄せられた浄財を教区本部に十万円、地球救援事務局に二万円を寄託。

桐生部では十二月七日、天王院周辺にて総勢十二名が托鉢行脚を実施。当日、国道一二号線は車の通りは多いが人はあまり歩いていなかった。時折すれ違う方の中には写真を撮っている方がいた。寄せられた浄財は、教区本部に五万円、地

球救援事務局に五万円を寄託。

東前橋部では部内各寺院より寄せられた浄財を教区本部に六万円、地球救援事務局に六万円を寄託。

伊勢崎部では部内各寺院より寄せられた浄財を教区本部に十七万円、地球救援事務局に十七万八千三百円を寄託。

世良田部では部内各寺院より寄せられた浄財を教区本部に十万円、地球救援事務局に二万円を寄託。



下仁田部では十二月六日、下仁田道の駅「しもにた」及び南牧村道の駅「オアシスなんもく」にて総勢六名が街頭募金を実施。各道の駅に分かれて行ったが、南牧村道の駅は人がいなかったため、急遽下仁田道の駅に合流した。寄せられた浄財は、下仁田町社会福祉協議会に三万三千五百七十七円、南牧村社会福祉協議会に三万三千六百円、群馬県仏教連合会に二万円、教区

本部に十万円、地球救援事務局に十万円を寄託。

西群馬部では部内各寺院より寄せられた浄財を教区本部に一万五千元、地球救援事務局に一万五千元を寄託。

群馬教区心月院では寄せられた浄財を教区本部に五千元、地球救援事務局に五千元を寄託。

茨城教区本部

十二月六日、第二部千光寺にて総勢十六名が戸別托鉢を実施。檀信徒の家々を托鉢させていただき、皆さまには快く募金していただけた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に十万八千五百三十円を寄託。

栃木教区本部

十二月一日、JR宇都宮駅前にて総勢三十一名が街頭募金を実施。例年、夕方の帰宅時間にあわせて実施している。学生や通学の子どもたちからも積極的に募金いただけた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に十八万四千三百九十九円を寄託。

福島教区本部

十二月一日、第二部日輪寺周辺から本市内中心部にて総勢三十八名が戸別托鉢及び街頭募金を実施。以前より毎年托鉢を行

ついていた地域のため、住民のご理解もあり、多くの方からご寄付をいただいた。特に日輪寺檀信徒の皆さまには事前に托鉢の日時詳細が通知されていたので、法螺貝の音を聞いて自宅や店舗の前で待っていてくれる方、慌てて外に出てくる方が多くいらつしやう。寄せられた浄財は、本宮市社会福祉協議会に八万三千五百十円、地球救援事務局に四万円を寄託。



陸奥教区本部

九月五日、前沢ふれあいセンターにて総勢七十九名が募金活動を実施。一隅を照らす運動推進大会と同時開催であり、大会終了後、当日の来場者約四百名



に快く応じていただき、多額の浄財をお寄せいただいた。寄せられた浄財は、地球救援事務局に三十一万百四円を寄託。

山形教区本部

山寺部では十一月二十日、立石寺にて総勢三十三名が募金活動を実施。当日は境内の三ヶ所に分かれて協力を呼びかけた。日本の方が六割、外国の方が四割ほどであり、特に外国の方は日本語が通じなかったが、身振り手振りで浄財にご協力いただいた。中には三ヶ所全てに浄財協力いただいた方もいた。寄せられた浄財は、愛の事業団に七万六千七百三十四円、地球救援事務局に十六万五千五百八十九円を寄託。

一隅を照らす運動ニュース

◎比叡山中学校ボランティア委員会が募金を寄託

令和七年十月十四日、比叡山中学校ボランティア委員会委員二名と担当教諭一名が来庁し、地球救援協力金として四万四百円を一隅を照らす運動総本部の荒樋勝善総本部長に寄託した。

この度寄託された協力金は、九月十九日、同校の文化祭においてボランティア委員会が開催したバザーでの収益である。バザー



校内外で様々な活動を行っている。

◎聖エジディオ共同体に支援金を寄託

聖エジディオ共同体主催の第三十九回「世界宗教者平和の祈りの集い」がイタリ



ア・ローマにおいて令和七年十月二十八日から二十八日までの日程で開催。天台宗からは天台座主代理の杉谷義純宗機顧問を名譽団長に八名が参加



した。
一隅を照らす運動総本部では例年、世界の恵まれない子どもたちの福祉と教育向上のための活動支援を目的として三十万円の支援金を聖エジディオ共同体に寄託している。本年は式典中、杉谷名誉団長より同共同体アジア地域担当部長のアグステイノ・ジョバニョーリ氏へ支援金目録が手渡された。

◎「歳末たすけあい」および「海外たすけあい」へ浄財を寄託

令和七年十二月十七日、天台宗全国一斉托鉢浄財寄託式が開催され、一隅を照らす運動総本部は「歳末たすけあい」と「海外たすけあい」へ浄財を寄託した。

社会福祉法人滋賀県共同募金会 桐畑正彦常務理事・事務局長、日本赤十字社滋賀県支部渡邊悠介事業推

進課長、NHK大津放送局 湯川雅史局長に来庁いただき、一隅を照らす運動副理事長獅子王圓明延暦寺執行、同運動理事長代理・荒樋勝善総本部長からそれぞれ目録が手渡された。

「歳末たすけあい」には、十二月一日に比叡山麓坂本地区で行われた「天台宗全国一斉托鉢」の戸別托鉢にて寄せられた浄財五十二万二千九百六十四円、「海外たすけあい」には、地球救援事務局から五十万円がそれぞれ寄託された。

また、本寄託式には比叡山幼稚園から武田功正園長、園児二名と保護者二名も出席し、比叡山幼稚園の有志による浄財が共同募金会および日本赤十字社の両代表にそれぞれ手渡された。

代表挨拶にて湯川局長は、浄財の寄託に対し謝辞を述べた上で、「今、必要とされている方々に対して大切に役に立てていただきたい」と発言した。

「歳末たすけあい」「海外たすけあい」は共同募金会および日本赤十字社を通じて、国内外の支援の必要な方々のために役立てられる。

◎比叡山高校宗内生が托鉢浄財を寄託

令和七年十二月二十三日、比叡山高校宗内生六名が来庁し、代表者の源田さんから



一隅を照らす運動総本部の荒樋勝善総本部長に地球救援協力金として五万六千円の浄財が寄託された。

この浄財は大津市仰木地区において十二月六日に行われた

「比叡山高校寒行托鉢」で集められた。寒行托鉢は宗内生が実践仏教の一環として例年行っているもので、黒素絹に手甲、脚絆、網代笠姿に装束を整え、読経しながら家々を行脚している。

寒行托鉢当日の様子について源田さんは「今年のご協力いただける方が多く感じた。昨今の厳しい情勢の中でも多くの方に協力いただけるのは大変に有り難いこと」と語った。

◎三千院門跡が托鉢浄財を寄託

令和七年十二月二十六日、京都教区三千院門跡の北川裕道師が来庁し、一隅を照らす運動総本部の荒樋勝善総本部長に地球救援協力金として六十七万二千二百二十四円の



◎「一隅を照らす運動」理事会を開催

令和八年一月三十日、天台宗務庁（滋賀

県大津市）にお

いて令和七年度

第二回「一隅を

照らす運動」理

事会が開催され

た。本理事会に

おいて、新たに

水上文義師が顧

問として全会一

致の推薦を受け

就任された。

議題としては、

令和八年度「一隅を照らす運



浄財が寄託され
た。

この浄財は京
都市左京区太原
地域一帯で十二
月二十一日に実
施された、歳末
の恒例行事であ
る「托鉢寒行」
で集められた。

動」の事業計画、各会計の予算等が審議・
承認された。

参加した理事からは能登半島地震におけ
る被災寺院への支援や、「一隅を照らす運
動」基金の取り扱いについて意見が出され
た。

【顧問】

水上 文義師

東京教区

輪王寺住職・新任

